

して元和錢專、豫錯專以下二百三十余面の錢專銘文を録す。

●地券徵存

羅振玉校寫

上は漢より下は元、明、高麗に亘る地券の文を收録したるものにして支那古文書學上稀有の史料たるを失はず、今其の目を列舉せば漢は建初買地券、孫威買地券、房桃枝買地券、吳は浩宗買地券、晋は楊紹買地券、朱曼妻薛買地券、魏は張殖洛買墓田券、唐は喬進臣買地券、劉元簡買地券、南漢は馬氏買地券、宋は馬隱買地券、朱近買地券、金は趙通買地券、元は有□□買地券、明は李□□買地券、殘買地券、郎斗金等買地券、殘地券、高麗は僧世賢買地券あり。(以上那波)

●古鏡の研究

富岡謙藏遺著

故富岡謙藏氏の晩年最も力を致されたる支那古鏡に關する論文を集めたるものなり。菊版本文四百十六頁、圖版九十六枚より成り、空文すべて十四編を收む。内「鑑鏡の起源」「日本出土の支那古鏡」「支那古鏡圖說」「支那漢六朝年號鏡考」「王莽時代の古鏡考」「銅銕劍伴出の古鏡の年代」等の七編は皆て本誌を初め華文、國華、考古學雜誌等に掲載せられしものに係るも、他の七編は未定稿の類にして著者の最後に抱懷せる研究を載せざるものなり。先づ其の「畫象鏡考」に此の特殊の圖様に現はる、西王母東王父の説話の影響を辿りて、時代の考察と其の製作地の北支那なるべきを論じ、「蟬螭鏡考」に於いては、文様の周秦等の古銅器に類似せるを指摘して支那鏡最古の型式を推考せり。「支那古鏡圖說」(補遺)は細線式狀帶鏡、內行花紋鏡、繪模樣神獸鏡等に就いての新見解

を録し、終に著者の到達せる漢六朝代の古鏡鑑變遷の一斑を概括せるもの、「再び日本出土の支那古鏡に就いて」は嚮に本誌(一、四)に發表せる稿をつぎ、同式鏡の集成を試み、其の年代を考定して遺物の分布と對照し、これより我が國文化の萌芽の状態を究めて、遺物上より日本建國の年代を考へ、魏志に見ねたる卑彌呼の何人なるやの問題に及び、又た本邦古墳墓年代研究の方法を説けり。「本邦仿製古鏡に就いて」は多くの遺品よりこれを類別して同じく我が古代文化の性質を論ぜるものなり。圖版は本文の順に依り新に作製せられしものにして、印刷鮮明、本文と對照して好資料と云ふべく、其の日本出土古鏡の集成圖の如きは本邦に於ける新しき試みとして研究上永く參考すべきものならむ。別に卷頭に内藤、喜田、濱田三博士の序文ありて、故人の業績を傳へ、其の研究方針を説き、卷末には梅原末治の「富岡先生の古鏡の研究に就いて」なる一文を附して、富岡氏の鏡鑑研究の由來を記せり。(定價八・〇〇、丸善株式會社)

●古墳發見石製模造器具の研究

高橋健自著

今回新に發刊せる帝室博物館學報の第一冊にして、主として同館所藏の石製模造品に就いて著者の綜括的研究を録せるものなり。四六四頁、本文六十頁、圖版二十四枚より成り、初に此の種遺品の研究上に於ける興味を指摘して、これを(一)武器及び武具(二)服飾具(三)農工具(四)厨膳具(五)機織具の五者に大別し、更にこれを二十七種に細分して一々圖に依りて其の形狀性質を記し、次に從來著者の注意に上れる此の種遺品の分布を録して、畿内と關

東に特に濃厚なるを擧げ、又出土の遺蹟の構造を検して、其の何れも古墳墓なるを注意して、一々の型式に依る分類を試み、此の模造品は支那の明器と同じ思想に基くも、其の間直接の關係なく、鏡さ刀劍の模造品の特に多きは寧ろ我が國民性の發露と見るべしとせり。而して最後に是等の製作年代に就ては(一)其の出土遺蹟に埴輪あるもの十箇所あること、(二)石棺に箱形舟形及び長持形あれども家形なきこと、(三)馬具の伴出僅に二箇所なること、(四)土器多きに反し陶器の伴出僅に二箇所なること等より論究して古墳時代の前期とも云ふべき比較的古き時代のものなるべしとせり。なほ此の文中石製模造品に小孔を穿てるもの、多きは櫛枝に懸垂せる爲なりと斷じ、また馬の我が國に習されしは韓土内屬の頃たるべしと云へるは著者の新見解として注意を惹く。

是等の記述中、分類分布の條には増補を要すべきものあるべく、發見遺蹟の状態を録せる章の畿内の部分其他多く地方廳の報告に基きし爲補訂せらるべきものなきにあらざるが如きも、豊富なる圖版を用ひて此の種遺物を分類し網羅記述せるは永く研究上の良參考たるべし。而して其の帝室博物館より此の種學報の公刊を見たるは學界の慶事として特筆すべく、圖を重ねて益々完備せらる可きを信ず。(定價一・五〇、帝室博物館)

●●●●●
日本古建築精華上

岩井武俊編

上中下の三冊に別る。四六四倍版別麗日本紙刷の大冊なり。著者が數年來實地に就いて自ら撮影せる我が特別保護建造物の寫眞を玻璃版となし、これに詳細なる解説を附して、古建築物を集

成する共に、實物に依る日本建築史ならむとせしものなり。今回刊行せる上冊は法隆寺の諸建築物を初め鎌倉時代及び以前の建築を主とし、收むる所二百九十餘棟あり。寫眞は何れも繪葉書型なるも印刷鮮明、中にはよく細部の平法を示せるあり、製本の典雅と待ちて稀に見るところなり。卷頭には伊東、塚本、黒板、内藤諸博士の序文を載す。これ等の諸序に云へる如く此の種の事業は官廳のまさに行ふべき所にして而も未だこれなかりしもの、今氏によりて、なされたるは一に其の熱心と其の好位置に居る結果に依るべく獨り美術の研究者の參考たるにとゞまらざるべし。(定價一八・〇〇 大阪毎日新聞代理部發賣) (以上藤原)

彙報

若狹國多烏浦秦氏所藏文永年間の

船旗及古文書

福井縣史蹟勝地調査委員上田三平氏は昨年十一月と本年一月と二回に向縣下若狹國遠敷郡内外海村田島に出張して同地の荏家秦守一氏所藏の古記録を調査し、鎌倉時代の船旗を始め多數の古文書を探訪せられたり就中珍貴なるは船旗にして長さ二尺四寸八分幅九寸三分、地質は上布を用ぬ上部に北條氏の家紋を描き其下に相模守殿御領若狹國守護分
多烏浦船徳勝也